

第四章 管理社会への反乱

五月革命については、実にさまざまに論じられているが、その中で特徴的なことは、五月革命の新しさを強調するものが多いことである。中には、すべては六八年五月に始まった、というものさえもみられる。その新しさの根拠としては、組織されていない、下部の大衆から運動が始まったことと、下部の大衆に引きずられて運動が頂点に達したこと、既成の労働組合や左翼諸政党が無能力を暴露したこと、革命は不可能であると見られていた先進工業国において革命の可能性が生まれ、社会主義への移行が問題とされたこと、などがあげられ、更にまた、アナキズムの復活、あるいはアナルコ・サンジカリズムの傾向の噴出も、五月の新しさを示すものとして強調されている。

しかし、そうした五月の新しさに力点をおく議論に、同調しない意見もある。その代表的なものは、たとえばダニエル・ゲランであって、ゲランによれば、五月の新しさを強調するものは、革命の過去の歴史に無知なものだ、ということになる。運動が未組織のものによって、下部から起され、下部の動きに引きずられたこと、それは革命というものは本来そういうものだからであって、歪曲されたあとの革命をではなく、起きたばかりの革命をみればいつもそうだとゲランはいう。

そして、アナキズムが復活したというのも、別に驚くべきことではなくて、あらゆる社会革命は、その発生時においてはアナキズム的なもの以外ではありえない、といっている。

ゲランによれば、一九六八年五月は、一九七三年のフランス革命の、一八四八年の二月革命の、一八七一年のバリ・コミューンの、第一次世界大戦の末期に相次いで起ったフランスの大ストライキの、そして一九三六年六月のストライキの、継承者であった。それらの革命的状况の中には、革命を歪曲し窒息させにくる指導者たちによって革命が回収されるまでは、いつも五月と同質のものが見られるのである。

それでは、五月には、それ以前の革命あるいは革命的な状況に比べて、何か新しいものはないのか。その点について、五月の新しさを否定するゲランも、ただ一つの新しさを認めている。それは、過去のように労働者によってではなく、初めて学生たちによって社会革命の起爆剤が形成された事実であるが、しかしゲランは、この事実をあまり重要視しない。彼は、五月革命の重要な局面は、学生的手中に主導権があった第一の時期ではなくて、労働者階級が社会的な大危機を生み出した第二の時期にあった、という見方をしている。

しかし、その点で私は、あまりゲランに同調できないものを感じる。確かに労働者が主体となった第二の時期は重要なものではあるが、学生たちが初めて社会革命の起爆剤を形成したという、その事実をもっと重視して見る必要があるのではないか、と思うからである。

なぜそのことにこだわるのかといえは、学生が初めて社会革命の起爆剤になったという事実は、

プロレタリアート対ブルジョアジーといった図式で示される、これまでのものとは違った階級闘争の焦点、少なくとも階級闘争の焦点の一つが生まれてきたのではないか、という予測を抱かせるからで、先進工業国における階級闘争の焦点は、食べるか食えないかという絶対的な貧困、窮乏をめぐってではなく、もっと別な面にも移ってきている、たとえば、食べることは食べるが、ただ食べるような状態ではご免だ、もっと人間らしく生きたい、という欲求の達成を中心にするようになったのではないか、と考えられるからである。

そういう変化は、社会革命の起爆剤が学生であったという事実の外に、労働者の闘争の中で最も尖鋭的に闘ったのは誰であったかを調べてみると、一層根拠のあることのように思われる。最も戦闘的であったのは先進的な産業の従業員であったといわれ、この点については多くの人々の一致した指摘がある。

たとえば、ルシアン・リューとルネ・バックマンという二人のジャーナリストは、五月革命の中には五つのパラドックスが見られたといい、そのパラドックスの一つとして次のような事実をあげている。

△既成社会▽の問題をとらえ、検討を加えようとした学生と、貧困階級、賃金生活者のうちでも恵まれない立場にある者などその既成社会からはみ出した人々とは、闘争を通じて固く結ばれてむしろ当然であったと考えられる。だが、結果は正反対であった。△進歩の陰におき忘れられ

た人々▽は大規模なストライキのなかで、△追従▽する存在でしかなかった。本来からいえば、彼らこそがまさきにダイナミックな運動を展開しても不思議ではない。それが終始、後塵を拝する立場にあった。運動の前面に立ってストライキを決定したのはいわゆる△先進▽産業部門の従業員であって、△進歩の陰におき忘れられた人々▽ではなかった。これらの産業部門では、労働賃金という面からだけみてもフランス全体の平均よりもはるかに上回っている。そしてそこに働く労働者の大部分は、すでにオートバイ、自動車、冷蔵庫、テレビ、洗濯機などにかこまれて、一種の文化生活を享受している。

また社会学者であるクードレイは、もっと明確にいつている。

一九六八年五月のフランスでは、産業プロレタリアートは社会の革命的前衛ではなく、鈍重な後衛であったということを強くかつ冷静に言うことが重要である。もしも学生運動が実際に晴天のへきれきのごとく生じたとすれば、このチャンスに社会を大地にしばらくつけたのは、プロレタリアートの態度、自分の指導部や体制にたいする受身な態度、その惰性、経済要求以外のものに保身的で、もっとも欺かれ、もっとも現代官僚資本主義の罟や術計に陥っている層は労働者階級であり、より特殊には共産党とCGTに従う一派であると言わねばならないだろう。この階級の

唯一の狙いは、消費社会のなかで自分の生活を改善することであった。……プロレタリアートの態度の根底にあるものを理解しなければならない。すなわち現代資本主義社会への同意、ブライベート化現象、社会的問題と取り組むことの拒否、消費競争は、そこでは支配的な要因となっているのである。まさにこれに対応するものとして——ポジティヴにたいするネガティヴとして——ヒエラルキーの受け入れがあり、企業内であれ、組合・政党の指導部にたいしてであれ、受動性と情性、経済面への要求の限定がある。

ではこのように一般に革命的ではなかった労働者階級に反して、革命的であったのは誰か。電子工業、化学工業、自動車産業などの技術者、労働者であり、教員であった。それは、中間管理者、上層労働者といえる層であった。彼らと学生たちが最も戦闘的であった事実は何を物語るのか。それは、現代の階級闘争の最も重要な点が、物質的な貧困、失業、政治や文化から切り離されているという、かつてプロレタリアートを闘争にかりたてたものとは別の要素、つまり管理社会に組込まれるか組込まれることを拒否するか、という点に移ってきていること、あるいは移りつつあることを示している、と考えられる。それは、管理社会に組込まれて、非人間的な労働を強いられて、経済的にはまあまあ暮しをするか、それとも規格化された人間であることを拒否して、もっと人間らしい生活を創りだそうとするか、そこに階級闘争の大きな焦点の一つが生まれてきていることを示している、と考えられる。そして、五月革命の最も尖鋭な部分は、そういう形の階級闘争を闘っ

たのだ、といえるのではないかと思われるし、そこに五月革命の管理社会への反乱という性格が見られる。

もっとも現代の階級闘争の主題を単に管理社会への反乱という性格だけに限定し、単純化してしまふことには問題がある。雇用の不安定は残っているし、絶対的な窮乏といつていい貧困も、現代でもまだ存在している。日本でも、高度成長の恩恵を受けている大企業の労働者に比べて、下請である零細企業の労働者の生活状態は、依然として食えるか食えないかという状態を脱していないと思われるし、フランスでも、日本円にして月収三万円とか三万五千円の労働者が相当数存在するし、また特に外国人労働者の生活条件は極端に悪い。そういうところに依然として階級闘争の焦点が残っていることは確かである。しかし、それと同時に、新しい形の階級闘争の焦点、単に経済的なものではなく、もっと別なもの、いわば人間回復を目指すものも生まれてきている、それも確かなことであろう。それが、管理社会への反乱という性格でいわれているものであり、五月革命の中で鮮明に現われてきたものである。

では、ここで、管理社会への反乱という性格が五月革命の中でどのように現われたか、それを具体的にのべる前に、一応管理社会とは何なのか、その点を簡潔に見ておくことにしたい。

管理社会の定義は難しい問題で、まだ必ずしも明確な概念が出されていないが、簡単にのべるとすれば、ある一元的な合理主義の支配が社会を貫徹している、そうした状態を指すと考えられ、社会主義国における官僚的な管理社会を別にして、資本主義国における管理社会だけを問題にする

なら、国家権力と結合した資本主義が、資本の利潤の安定した確保とその発展のために獲得した社会支配、あるいは社会操作のメカニズムである、といていいのではないかと思われる。別な言い方をすれば、管理するという言葉は、秩序だて、ある一つの目的のためにすべてを整えておくことを意味するが、管理社会の下では何が秩序だてられ、何の目的のためにすべてを整えられているかといえば、資本の利潤をあげるために、社会の全面にわたって資本の論理を貫徹させ、その貫徹をほぼ完了した、そういう時代が今日迎えている管理社会である、といえる。それは、資本主義的収奪の合理主義的なメカニズムが完全に組織された社会ともいえるし、そのメカニズムを非常に善意にとるとしても、生産力をあげることに、それが人間一般の利益につながるものであるから、企業の安定的な発展が国民のために望ましい、という考え方の下に社会が組織されてしまった状態、といえる。

この管理社会化を進めたものは、生産における機械化、技術革新、オートメーション化と情報手段の飛躍的な発展を背景とした、企業の大規模化、組織の拡大、その中で管理的要因の増大であり、また資本の独占化と独占資本と国家との結びつきの強化であった。問題の焦点は、資本の利潤を確保するための市場の確保にあり、生産が大規模してくると、それを安定的に供給する必要、つまり、安定した需要、安定した市場が必要となる。そして、安定した市場の確保のために、主として三つの方策がとられたのである。

一つは、競争相手を市場からできるだけ排除すること、これは資本の寡占化、系列化といわれ

る現象である。

もう一つは、一見資本の利益を損うかに見えながら、資本主義の維持のために行なわれた賃上げによる、大衆の生活水準の引上げ、購買力の増大である。

もう一つは、購買力を確保するための、欲求をかきたてる操作を実に大規模に、組織的に行なっていることで、これはテレビなどのマスコミを通じての宣伝に端的に現われている。

そして、こうして完成された、大量生産大量消費のメカニズム、それによる資本の利潤の安定的な確保のメカニズムの、補強をし、仕上げるものが、独占資本と国家との結合であり、テクノクラートによる政策の操作である。したがって、管理社会とは、経済力と政治権力を握っている、ブルジョアジーとテクノクラートの結合による寡頭的な階級支配のメカニズムである、ともいえるのである。

この階級支配は、支配を安定する必要があるから、確かに一般民衆の生活水準をあげた。先進工業国においては、民衆は一応ある程度の物質的な豊かさを持つようになった。少なくとも飢餓線上からは脱している。しかし、人間はパンだけで生きるものではない。そこに管理社会への反乱が起きてくる原因があるし、新しい形の階級闘争が発生する理由がある。なぜ反乱が起きるのかといえば、管理社会の下では、人間らしく生きたいという、人間の欲求が抑圧されているからである。

では、管理社会の下で、どのような人間の非人間化が行なわれているのか。それは、生産者としての側面と消費者としての側面の二つから指摘できるが、これについては別に書いたことがあるの

で、少し長いけれども引用してみることにする。

管理社会下における生産者としての人間は、最大の効率をあげるための一要素、ただそれのみであることを要求される。効率を追求するためのシステムがたび組まれてしまえば、特に優れた人間は不要である。立派な人格や豊かな才能を持った人間が要求されることはない。むしろ排除されよう。求められるのは、あるシステムの中の部品としての人間であり、ある組織に組み込まれた歯車としての役割である。課せられるのは機械的な仕事であり、それは端的にいつて、機械の代用品として人間が用いられる状態であり、人間は、機械化やオートメーション化できない部分で使用する機械とみなされる。貫かれるのは、最大限の効率達成という一元的な合理主義であり、人間の多様な希求はすべて圧殺される。そこで仮に人間性尊重が謳われるにしても、それは最大限の効率をあげるための阻害要因を減少するためのものであって、目的達成のためにあらかじめ計量しておくべき一要素であるにすぎず、本当に人間が尊重されているからではない。当然のことながら、働いていて、あるいは、働らかされていて、人間としての意欲や創造性を発揮することはできない。人間としての全的な要求を満たすこともできない。単に物質的な代償と交換に、自分の持っている能力のごく一部を使って、与えられた仕事を間違ひなく（立派に、ではない！）果すことを強いられているのである。しかし、人間は単に物質的な代償のみで生きることはできない。無味乾燥な、屈辱的な歯車としての仕事に耐えながら、一方で何らかの人間的な

希求への渇きが募る。こうして、管理社会下の生産者としての人間は、自分の中で引き裂かれる。その分裂は、心理的、神経的な葛藤を生みだす。しかも、歯車としての仕事は、生産性を高めるための合理化の名の下に、絶えず強化される傾向にある。それは強度の緊張を伴う。精神病やノイローゼ、アル中が増加するものごとく自然のことである。そこまでゆかないにしても、何らかの精神的な破綻は一般的なものとなる。そして、消費者としての側面からの非人間化が、人間の痴呆化、狂人化を一層促進する。

生産者としての人間の状況を貫いていたものが、最大の効率をあげての利潤追求のための合理主義であるとすれば、消費者としての人間の状況を貫いているのは、できるだけ人間の力を使わないで安楽を享受させるための、その安楽を商品として購入させるための合理主義である。消費者は安楽に慣らされる。常により以上の安楽が新しく用意される。消費者は安楽を享受しながら、いつも新しい安楽への飢餓感に悩まされる。そこから焦燥や恨みや妬みや僻みといった、精神の平安にとって望ましくないものが生まれるが、それ自体はまだ、より根底的な問題から派生した一現象であるにすぎない。最も重大な、最も本質的な点は、それらの安楽はできるだけ人間の力を使わずにえられるものであること、したがって、人間が自らの力を用いてえた充足とは全く異質のものだということである。よく知られているように、肉体をできるだけ用いずにすませる安楽は、肉体の能力を衰弱させる。自動車を常用すれば足腰は急速に弱まる。同様に、用いられなければ精神も弱体化する。あるいは、強靱にならないし、成熟しない。自ら用いられなければ

は精神は外的な刺激を受けるばかりである。そこで衝動的な反応にのみ己れを委ねる。そして、安楽として、商品として供給される外的な刺激は、今日では周知の如く氾濫している。精神は絶えず強烈な刺激にさらされている。刺激が刺激であるためには常に強度を増す。こうした環境の下では、まず感覚の鈍化、少なくとも洗練の停止が起きる。視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚、あらゆる感覚の退化ないし未発達という状況が生ずる。感受は思考―想像力の作用の根底であるから、感受の鈍化は必然的に思考の単純化、幼稚化をもたらす。刺激の一形態である現代特有のスピード感覚は、持続した観察なり熟考なりを許さないから、思考の単純化はその面からも促進される。衝動的な反応にのみ頼って、考えるという姿勢は失われる。外部からその面からも促進される。満足のみを求めて、自分自身であること、自分の力を尽して自足をするという姿勢は失われる。外から操作されやすい人間が生まれる。次第に人間らしい感情が失われ、社会生活を営むに耐えない人間が生まれてくる。社会生活を円滑に営むに足る最低の条件は、社会は自分一人だけで成り立っているのではないこと、他人の存在を認めることであり、進んで、社会の中で自分の責任の自覚、他人への愛、思いやり、優しさ、を持つことが望ましいであろう。責任なり思いやりの感情は、経験の中で自分を見据えて、人間というもの、社会というものについての現実感覚を養ってゆく過程で培われる。そして、この現実感覚を追求してゆく姿勢、それは自己の存在を主體的に生き、自分を賭けて何かすることで、生命の充足なり安らぎなり、あらゆる人間らしい感情の源泉であるカタルシスなり、をうる人間にとって、ごく基本的なものであろう。し

かし、管理社会下の消費者として操作される人間は、そこからますます遠のいているのが現実である。積極的に自己を見詰め、自己を形成する姿勢は失われていて、全く受動的となり、不断にどぎつい刺激を受けていなければ落着かず、幻想に憑かれ、エゴイズム、他人との安楽の対比にだけは過敏で、虚栄を競い、絶えず不満にかられていて、衝動に走る。こうして、人間の痴呆化、狂人化が次第に完成されてゆく。

管理社会の下での人間の非人間化の状況は、要約していえば以上のようなものであると思われるが、五月革命は、少なくともその最も尖鋭な部分は、そうした管理社会下の非人間的な状況、そして、管理社会という形で現われた一つの文明の原理そのものに、強力に異議を申立てている。それは、具体的にはどのような形をとっていたであろうか。

まず学生の場合、五月革命を推進した学生たちは、栄達の道を拒否した、彼らを待ち受けている専門的な幹部としての栄達の道を拒否した、そして卑俗な、凡庸な、抑圧的な、圧制的な、不純なブルジョア社会への全体としての異議を申立てたことは、すでに第二章でのべたが、それはなぜなのか。

彼らは、彼らを待ちうけている仕事にうんざりしていたからである、確かにそれだけではない面もあり、六八年当時、フランス社会には相当数の失業がみられて、学生たちにとっては、学士免状をえたものの適当な就職口もない、という事情もあった。それが彼らの不満をかりたてたことも事

実であろうが、しかし、就職口がないこと以上に、あらゆる就職口が彼らにはうんざりするものに見えた、これが重大なことであった、と思われる。

彼らは、仮に就職口をえたとしても、そこで自分たちの能力、勉学の過程で身につけた能力、それを活かすことができれば生きる喜びがえられるであろう能力、そうした能力が、現在の管理社会の下での雇用の中では活かされないであろうと感ずる。そして、要求されるのは、こまぎれの能力でしかなく、そこでは、無気力に生計を立ててゆくことしか許されない、と予感する。そう予感してうんざりする。

したがって、そんな風にしか人間を活かすことのない社会そのものに対して、反抗しようとする。五月革命の重要さは、単に国家に対して、あるいはブルジョア権力に対して反抗したことではなく、それら一切を含めて社会の総体を裁いた、現在の社会が享受している文明のあり方そのものを裁いた点にある。たとえば、コーン＝ペンディットは次のようにいう。

学生は大部分貧乏人ではない。その異議申立ては、階級化された構造を、安楽の中にひそんでいる圧制を目指している。学生たちは、物質的にはなく、欲望の面で貧しい日常生活を拒否する。欲望がもし存在するなら、昇華されねばならない。

ここで欲望というのは、消費者としてかきたてられている類の欲望ではなく、人間としての希求

を指している。したがって、人間としての多様な希求の面からみて貧しい日常生活を拒否する、といているのである。その拒否は、必然的に現在の社会、現在の文明の拒否に向う。それは、管理社会の拒否であり、大量生産・大量消費文明の拒否であり、生産力を発展させ、物質的な安楽を増大させれば人間の幸福につながるという、信仰あるいは欺瞞の上に成立している文明の拒否である。たとえば、五月にまかれたあるビラは、「われわれを解放する筈であった機械化は何をもたらしたか、機械主義と技術の進歩は何をもたらしたか、それはわれわれを誤ませた不幸な信仰ではなかったのか」と問うている。

また、五月にナンテルの文学部でまかれたビラは、こうのべている。

現在の運動を、一個の政体を廃しようという意志、あるいは資本主義の内的矛盾などによって説明するのは十分ではない。われわれの異議申し立ては、次のものを告発している。

——特権者の財産と考えられ、若干数のもののための社会的昇進の保証であっても、すべてのひとびとが近ずきうる、人間的昇進の手段となっていないひとつの文化

——現在の社会を基礎づけている、政治的、経済的、社会的な人間関係の総体

——消費にのみ捧げられた世界、これは大衆に、人間の問題は単に物質的安楽の増大にかかっていると信じさせて、その大衆を巻きこもうとしている少数者を益するものである。

また、建築専門学校でだされた文書は、次の点を強調している。

われわれの社会は、部下のものの無能力を仮定する原理に支配されていて、次の図式による二極に分けられている。

決定権——財産と結びついた権威
多数の部下——責任なし

この原理は、更に次のような自らについての確認をもたらす。

——財産と集中化した権力は、絶えずより以上の権力を要求する。

——大衆は、その権力が差し出す消費の幸福の中にますますはまり込むために、自分の責任を放棄する。

——この循環は強化されており、各自はますます個性をなくし、毎日少しずつ生産し消費する機械になりつつある。

したがって、能力を持つものに、当然彼らのものである権力を返さなくてはならない。
必然的な帰結。

——決定権の細分化

——責任、つまり政治的意識の再生

しかし、そこに到ることをすべての人々に許すことなく、能力あるものを権力につけるのは、文化の独裁制を樹立することとなる。

したがって、文化革命と呼ばれるものが必要である。

更にこの文書は、具体的な行動のための提案として、他のあらゆる人間的価値に対する、経済的要求の優位を改めて告発することを求めている。このように、五月革命における管理社会への反乱という性格は、与えられ、押しつけられる価値、管理し操作されることを拒否し、決定権を奪還し、自分の生き方を自分で決定し、それを自分の責任において遂行しようとする意志に現われた、ということが出来る。

そして、学生の間では単にイメージとして出されたそうした意志、決定権を誰かに集中しておいて、それに単に管理されるのではなく、自分も決定に参画し、企業の運営、社会の運営、人間の生き方、文明のあり方を自分たち自身で決めようとする意志、それは、労働者の間では具体的な闘争の形をとって現われた。

それは、単に賃上げや労働時間短縮を要求するというのではなく、自分たちで企業を管理しようとする形の闘争によって表現された。アラン・トゥレーヌによれば、「労働者に企業管理能力があること、更に企業を通じて社会を管理する能力があることを主張しながら」、闘いが挑まれたのであった。

それらは、自治管理、あるいは自治管理への試みという風に概括することができ、その実態については次章でのべるとして、ここでは、一例として、フランス国営放送ORTFのストについて簡単にふれておくこととする。

このストは、ORTFの首脳部が、五月上旬の大学および政治に関する諸事件を報道することを拒否したことから発生した。そして、技術者および事務職員を主とする全職員の九〇%が参加し、特に報道記者が積極的に活動した。問題の焦点は、報道の自由であり、政府による報道の政治的歪曲の拒否にあった。そして、政府の支配下にあるORTFの変革が主題となった。このストは、五月、六月にわたるストの中でも最も烈しかったものといわれ、最後には徹底的な弾圧を受けて、百人もの報道記者の懲罰や解雇が行われたのだが、経済問題ではなく、報道の自由、報道に対する国家支配の排除という点で闘われたこと、つまり、事業の社会性が問題とされ、事業内部の権力が問題とされたことは、五月革命の新しいさを象徴した一例である、といえる。

ここには、階級闘争の焦点が単に絶対的な貧困という経済問題だけではなく、別の面にも現われてきていることを如実に物語るものがある。そして、この事実については、自治管理についてのべる次章においても、いくつかの証左が見られることであらう。

第五章 自治管理への出発

この章では、五月革命における自治管理の実態とそこで提起された問題について書きたいが、その前に自治管理とは何かについて簡単に振り返っておきたい。

自治管理とは何か。一口にいえば、それは労働者自身による労働者を解放する手段であり、また労働者が解放された社会における経済の管理の形態でもある。経済は誰によって管理されるべきか、という問には、三つの答がある。一つは、資本主義的私有による。一つは、国家による。一つは、提携した労働者による。第一が自由企業であり、第二が国有化であり、第三が社会化つまり自治管理である。

資本主義的私有を打倒したのちの、経済のあり方については、一般に国有化が考えられている。しかし、それが果して労働者の解放につながるかどうかは疑問である。むしろ、政治権力のみならず経済的権力を手中にした国家、それは資本主義国家以上に怖るべき専制的な性格をもった官僚国家となるのではないか、人間に対する人間の支配は、弱められるどころか強化される、そういう考え方にたつて、国有化とは別に、資本主義的私有を打破したのちの経済の管理を考えようとするも